

我流子育て支援論

(8)

～ 思春期後半・大人への過渡期 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

義務教育を終えた子どもたちは、殆どが高校に進学している。その理由を聞くと多くが、「高校くらいは出ていないと就職が無いから」とか「みんなも行くし取りあえず」という。高校を出て〇〇大学に進学し、××を勉強したいからという、将来への展望をしっかりと持った子は少ない。しかも、高校をどのように選んだかを聞くと「学力に相応しいから」、「親や教師に勧められた」が圧倒的で、その次が「どうしても行きたいと思った学校だったから」となっているようだ。女子の場合は「制服が可愛いから」という理由も加わる。

高校のスクールカウンセラーをしていると、学校によって違いがあると感じる。レベルの高い高校では、保護者もインテリで社会的にも認められているため、子どもに、「親と同程度あるいはそれ以上にならなくてはならない」という無言の（時にはあからさまな）プレッシャーをかけている

ケースに度々出会う。しかも本人自身、勉強をすることの必要性を強く感じているのに、学力がついていかないと悲劇になる。一方、レベルの低い学校では、「高校は卒業できればよい」程度に考えていて、大学や専門学校に行ければ尚良いと思っている子が一部いるものの、既に大学で行けるところは限られ、保護者の経済状況によっては、それも断念せざるを得ない子も多い。

また、それぞれの家庭の事情というのも当然あるし、それは、高校のレベルの高低に必ずしも関係はない。

高校から更に大学や専門学校に進む子や、早々に親になって行く子と、この頃から人生が大きく分かれていく。そこには家庭、家族の問題や影響が絡んでいる。10代で妊娠出産した母親の子は、やはり10代で妊娠出産することも多い。

ここで、思春期後半によく見られる問題を述べてみよう。

まずは、保護者の夫婦関係の問題である。

長くなりつつある思春期の最中に、父母の関係性が悪くなり、浮気の問題や離婚の問題、再婚の問題などが見られる。家庭基盤がしっかりと安定しない中で、思春期の心の揺らぎを抱えた子どもたちが不安定になるのは当たり前の結果であろう。しかも様々な形でそれらの問題に巻き込まれるのである。

母子家庭で、母親に彼氏ができ、その上ヒステリックに子どもに当たる事例があった。母一人子一人の中で、娘は家事のやり方が悪い、帰りが遅いとなじられ、思春期の娘の気持ちを全く理解せず、まるで子どものような振る舞いを続ける母親。可愛らしい母親に比べ、娘の容貌は普通。実父は既に再婚して家庭を築いているため、実父に頼るわけにもいかない。しかも大学で家から出たいと訴えても、受け入れてもらえない。勉強をする気が無くなり、成績はどん底まで落ちて行った。母親と口をききたくないため、部屋に閉じこもるが、そこに母親がまた入り込んできて本人の気持ちをかき乱した。「死にたい」と何度も訴え、カウンセリングでフォローしていた。良かったことは、彼女には同じような境遇の友人がいて、二人で支え合えたことだ。高校の間に、娘の方がどんどん大人になって、母親を「しょうがない人」と受け入れて行ったが、3年間、決して平和な日々では

なかった。

母子家庭、母親に男、母子関係の悪化の三拍子がそろっているケースのなんと多い事か。母親は自分の娘に対し、極めて威圧的になり、コントロールしようとする。それは、思春期の親子関係ではよく見られる現象ではあるが、コントロールしようとするほど、関係は悪化する。悪化した結果として、引きこもり系は不登校に、飛び出し系は非行になっていく。

ちょっとここで話がずれるが、最近の傾向として、全般的に非行系が減っているように思う。それだけのエネルギーが無いのである。

少年院に入っている子どもたちの数は、激減である。10年前の約半分。人口減よりもずっと大きな変化である。少年院に入るような問題を起こした方が良いと言っているわけではないが、思春期に大人に対し反抗的な態度を取り、汚く思うと思う大人の仲間入りをする事への抵抗感から必要以上に強く反発するのは、当たり前の行動であろう。しかし、思春期の反抗的態度が殆ど見られない子供によく会うようになった。そういう子どもたちが良く言う言葉に「面倒くさいから」というのがある。あれもこれも面倒くさいのである。母親に反抗したら、うるさく言われて返って面倒だから何も言わない、先生に反抗したら問題になるから何も言わない、というように、黙って過ごして行こうとする子が多くなっているのだ。一見良い子ではあるが、小さい

頃から家族の目に曝され過ぎた結果ではないかを感じる。

話を元に戻すが、最近の高校生・大学生を見ていると、全般的に女子の方が元気で、男子は大人しい雰囲気強い。草食系男子と肉食系女子というイメージである。男子はとても優しく、女性的になりつつあるように見える。一方女子は益々しっかりして、積極的で、リーダーシップをとっている。

相談場面でも、リストカッターや拒食の男子生徒が増えた。女生徒からの相談で「彼氏と別れたいが、『別れよう』と言うと『手首切って死んでやる!』」と言われる、別れられない。」と言う話も聞かれるようになった。ちょっと前なら女子のセリフだろう。「狩る」ことが無くなり、平和な現代では命の危険にさらされることもなく、闘争意欲は低下している。学力偏重や寄りば大樹の考え方が薄れ、競争意識も減った現代では、男性に強さやたくましさは余り求められないのかもしれない。女性的で優しい男性が良しとされ、男性が体毛を気にし、化粧をするようになっていたから性の逆転ともいえる現象があっても何の不思議もない。これからまた転換期があって、強くたくましい男性が良しとされる時期が来ると良いのだが、性の差異、性の特徴が段々あやふやになっている。

また、思春期の子供たちの人間関係はと言えば、とても希薄で、表面的な場合が多く、人格のぶつかり合いを避けている。自分の人格を形成する上で、他人の

人格と接していくことはとても重要である。「自分の顔を知るのは他人の顔を通してである」と言うサルトルの言葉のように、他人を通して自分を知るためにも、自分の素を出すべきだが、傷つくことを恐れる子どもたちは、素をひたすら隠す。そんなことでは人格は成長しない。

自分の素の思いや考えをぶつけることを恐れ、ひたすら「良い人」を演じる。思春期の人間関係は子どもたちが思っているほど取り返しのつかないものではなく、いくらでもやり直しがきくのだということを理解していない。他人に対する気遣いばかりにエネルギーを消耗し、全体的にエネルギーが低く、「若さ」のエネルギーが感じられないのである。先ほど述べたこととも繋がる。

さて、思春期の終了とは何か。それは大人になるという事であろう。経済的にも精神的にも自立し、社会で適応的に行動し、仲間を作り、家庭を持つなどが可能となることであろう。成人式の意味はかつては大人になるという事であったと思う。しかし、20歳を向かえる前も後も、何の変化もなく、お酒を堂々と飲めるようになった事以外は、相変わらず、いつまでも子どもっぽく、社会常識や社会性と言った、「大人として自立すること」に向けての思春期の課題を中々クリアーしない。それには、以前に述べたように、人生が長くなって慌てて大人になる必要が無くなったことも影響しているだろう。結果として、思春期の期間がどんどん長くなり、30歳を過ぎても思春期の問題をクリアーしていないケースに

多く出会う。そういう人が父親、母親になると子育てに様々な問題が起こる。支援者としては、こうしたケースに頭を悩ませることになる。だからこそ、思春期の子どもたちへの自立や人間関係、親になることについての教育に力を入れて行かねばならないと思うのである。

子ども側の問題だけではなく、保護者の問題も大きい。

大学の入学式に保護者が沢山参加するため、学生の数が多い大学では大きな会場を用意しなければならなくなった。もちろん卒業式も同様である。さらに社会人になっても、会社の入社式に両親が来たり、病欠の連絡を母親がするなど珍しくもなくなった。ちょっとしたいじめ(意地悪)が職場で起これば、母親が上司に直接文句を言いに来る事さえある。

中学期で述べたように「思春期は大きな生簀で放し飼ひ」と筆者はよく保護者に伝えているが、生簀が小さ過ぎる保護者が多い。反対に、全く囲いが無い保護者もいて、こちらは無法地帯と化す。これも困る。

生簀の囲いは基本的に、他人に迷惑をかけたり、法を犯したり、他人を傷つけたりと言う事だろう。子ども自身が失敗して痛い目を見ても、放っておく勇気が親には必要なのである。しかしその勇気がない。子離れできず、いつまでも小さな囲いの中に閉じ込めようとしている。

何時まで過保護に子ども扱いをしてい

くのか？そうやって子ども扱いをすればするほど、大人になる過程は阻害される。もし、子どもに力があれば、反抗して「うるさい！」と怒鳴ってみたり、サッサと家を出ていくこともできるが、そういう力もない。小さいころから親に気を使って、親を悲しませたくない、心配掛けたくないと言いながら、問題を抱えても解決することもなく、ただひたすら我慢したり、無かったことにしてきた子にそんな力があるわけもない。

昨年、引きこもり対策と言うことで、39歳までの対応をする部署を役所に置くようにと言う通達が出たようだが、引きこもり青年の相談でも子どもたちの力の無さ、思春期の長期化、保護者の過保護の問題を感じている。保護者が引きこもらせているのではと思う事例に出会うことも増えた。

例えば、30代の男性。大学卒業後就職したものの、数年で辞め、違う仕事についても長続きせず、結局もう10年近く自宅でぶらぶらしている。友人関係もどんどん消滅して、最近はコンビニに出かける程度とのことだった。家では家事を手伝うでもない。保護者に追い出す気持ちはあるかと尋ねると、「やっぱり追い出さないとだめですか？」と返された。追い出すも追い出さないも、筆者側が決めるようなことではないが、自立させたいと思うなら追い出す覚悟も必要ではないかと伝えた。

それから半年たって、再び相談にいらした保護者から、「アパートを借りて家を

出す覚悟を決めた」との話がきかれ、その決断を支持したが、すぐ後の言葉が、「それにしても、当分は生活費を援助してあげないとだめですよ。」であった。「いくら援助するおつもりですか？」と聞いたら「10万円くらいは・・・。」とのこと。それだけあったら、何もしなくても生活できるだろう。引きこもる場所が変わるだけである。保護者にそう伝えて、「せめて半分にしましょう。」と提案したが、その後どうなったか。しかも帰り際に一言「今年の正月はお年玉をあげませんでした。」と胸を張る勢いでおっしゃった。まだまだ前途多難と思ったのを覚えている。

また、発達障害を持った引きこもり青年の就労についての相談も多いが、こちらも多難である。高等養護等を卒業した子どもは、就労支援がしっかり出来ているし、福祉制度に乗っているので比較的安心だが、普通に高校や大学を卒業しながら、発達障害故に職場不適應を起こして働けなくなったり、鬱になっている青年の支援は大変である。面談が出来れば発達障害がありそうか、鬱の症状がありそうか分るし、保護者が正確に様子を伝えてくれれば見当もつく。しかし、発達障害の診断や鬱の診断のために、精神科受診に繋ぐのに一苦労。そこをクリアしてから、障害を受容し、抱えての就労に進めるのに更に一苦労。そして、ジョブコーチを付けてもらい、適当な職場に就労させても、また人間関係でトラブルを起こすので、そこでも又苦労がある。成人であれば、障害者年金を申請したいかどうか、更に支給してもらえるかどうか

かも検討していかねばならない。

発達障害を持つ青年たちは、彼氏彼女を作りたいと思いながらも、対人面の弱さから中々積極的に関われないか、積極的すぎてストーカーまがいになり嫌われるなど、上手く行かず悩んでいる。そんな彼らや人間関係が苦手な人たちが入り込むのが、ネットの世界である。出会い系のサイトに登録し、やり取りするうちに結婚するケースも多くなった。女性の場合は、寂しさから異性との交流に執着し、妊娠してしまうケースにも出会う。しかし、メールでのやり取りは必ずしも事実だけ述べているわけではなく、ちょっと付き合っただけで、良くお互い知りもしないうちに、妊娠し、結婚に至っているケースでは、離婚になる事も多い。

こうして出会い系で知り合う青年たちを見ていると、親子関係にも問題を抱えていて、自己肯定感が低く、人格形成も不十分で、思春期が終わっていないケースも多い。そんな状態で親になっても上手くいかない事は想像に難くない。もちろん皆が皆と言うわけではない。

以前にも述べたように、基本的には人間は動物なので、子を産み育てる能力を遺伝子の中に持っている筈で、妊娠出産を通じて親になっていき、更に子育てをしながら親育ちをして行くものである。それは、子を第一に考え、自己犠牲的に子育てをして行くことで育っていくものと思う。しかし、極めて自己中心的で、自分を第一に考える親が多く、自己犠牲が我慢できず、子どもを育てる事をスト

レスに感じ、虐待を生むことまである。

頻繁な授乳が嫌だ、おむつを替えるのが気持ち悪い、吐かれるとどうして良いか分からない、泣かれるとパニックになる、夜泣きがうるさくてイライラする、寝てくれない、食べてくれない、要求がうざい、「何で」ばかり繰り返されて煩い、出来もしない癖にやりたがるのが腹が立つ、etc.

こんな訴えはすべて、子育てでは当たり前のことや、心身の発達に伴って起こってくることなので、親がドンと構えて対応したり、発達上当然のことと受け入れていけば、自然に成長し変化していく。しかし、それが出来ない親が多いために、子育て支援はどんどんきめ細かく、親切になり、その分親は我慢すること、気長に待つこと、何とかかなると思えることなどを学ぶ、「親育ち」の機会を失っているのではないか。

ネットを活用して、子育てのノウハウを学ぼうとしている若い親も多いが、ネットに書いてあることが全て我が子に当てはまるか、或いはネットに書かれている親に自分が当てはまるかなどの検討もなく、情報だけを鵜呑みにして、父親に「ネットで皆言っている」とか「ネットに書いてあった」と言い張り、喧嘩になる夫婦もいる。「皆って誰？何人？と突っ込みたくなる」とある父親が嘆いていた。子育ての悩みを先ずは父母が共有し、一緒に悩み、解決を考えることが、家族としての第一歩だと思うが、そこから躓いている事も多い。そこには父母両方の成

長度が関係していると思う。親として十分育っていない者が、子どものために我慢したり、頑張ったりできるはずもない。

思春期を終えないうちに父母になり、子育てを始めることで、周りの支援者は不安を抱く。そんな周りの不安をよそに、乱暴な子育てでも何とか育てている父母もあれば、ネグレクトになっていく父母もある。その見極めは、医師、助産師、看護師、保健師などの勘に頼るところが大きい。

我々支援者はこうした父母をいち早く見極め、必要な支援をしながら、父母を育てて行かねばならない。しかしながら、それには膨大なエネルギーが必要になる。しかも、何のプログラムもない中、やり過ぎない、程々のところで支えて行かなければ自立はあり得ない。

支援者として、依存を生まないように気を付けながら、しかも子どもの安全と健全な育ちを第一に考えねばならないのである。それは時には大きなジレンマを抱えながらの支援となる。子どもを親から引き離せばよいと言う事にもならないし、子育てをその親に任せておけば、子どもに様々な心理的影響を与え、今後の育ちに問題を生じると分かっている、目を瞑らねばならない事もあるのだ。

今まで、子どもの育ちに添って、子育て支援について論じてきたが、こうして思春期、そして、親になる世代まで見てくると、最近の子育て支援は、至れり尽くせりだと感じる。しかもお金の有る無

しが、受けられる支援に差を生んでいる。今のような不況の時代に、持つものと持たざる者の差が大きくなるのは仕方がないとしても、子育て支援としては、出来るだけ差が無いようにしたい。そのためには、お金を親にばらまくのではなく、無料の支援を増やす方に使えばよいのである。だからと言って何でも支援すればよいと言う事ではない。必要な支援を程よく準備しておくと言う事である。もちろん、利用者の査定はしっかりしなければならぬ。

最近のマスコミを見ていると、子育ては「楽しいもの」「幸せなこと」、子どもは「この上なく愛しく可愛いもの」という幻想を、若い世代に与えすぎなのではと思う。それは少子高齢化の施策として、政府が国民に植え付けた幻想なのではと思ってしまうのは筆者の思い過ごしか？その幻想故に、現実の大変さにぶつかり、「こんな筈では・・・。」と幻滅し、自信を無くし、子育て支援を必要とする親を増殖しているのではと思う。子どもは泣くし、わめくし、汚すし、何度言っても同じことを繰り返すし、反抗するし、面倒くさいし、手がかかるもので、子育ては大変なのだ、何事実を伝えないのか。子どもを産ませるための罨にはまらず、冷静に、子を持つことを検討し、準備してから産めば良いのである。そして、子育ての醍醐味は、子離れの寂しさもあるが、最終的に一人の人間を大人として自立させたときに感じる達成感であると伝えればよい。

また、性の衝動を抑える事も出来ず、

子を持つ準備のないまま、親になってしまふことは、親子双方にとって不幸なことだ。人間には理性があり、自分をコントロールする力がある筈ではなかったか。子を持つことについて、もっと慎重に、よく考えて行動するよう思春期から教育して行かねばならないと思うのである。

子育てについても理想を押し付け過ぎではないか、気を付けなければと思う。今より少し良くなれば良しとされるならともかく、ちょっと良くなればもっと上を要求される。完璧な親などどこにも存在しないのに、完璧を意識してしまう母親たち。100点満点志向の教育を受けてきた影響が、母親のゆとりの無さの原因になっていないか。また、支援者にも100%が要求されれば、支援者のストレス、疲弊も生半可なものではなくなる。親の能力、経済力、環境を考慮して、必要最低限の子育てがどの程度かという線引きを、しっかりしていく必要があるだろう。上を見れば、欲を出せば、支援にきりがなくなる。

何事も「適当、程々、好い加減」。以前も述べたように、これは筆者のモットーである。子育ても子育て支援も、「適当、程々、好い加減」でやっていけば、きっと良い子育てと子育て環境になっていくのだろうと思う。「過ぎたるは及ばざるが如し」今こそこの言葉を子育て中の保護者と子育て支援者に贈りたい。

今回は虐待について書いてみようと思う。